

保育の現場から

三歳児の

「おおかみと七匹のこやぎ」

吉岡 晶子

一学期がもうすぐ終わろうとしている七月のある日、暑さで汗を流しながら砂場で遊んでいると、A子、B子が保育室の出入口までやって来て、「先生、来て」「おおかみとやぎやってるからはいって！」と大声で誘った。「おおかみとやぎ?」。いったいどうなっているのやら……と思いつつ保育室に行ってみると、製作コーナーの机の周りには、椅子がバリケードのように並べてあり、囲いになっていた。その中にはC子がいた。「おおかみと七匹のこやぎ」のおうちごっこなのかな? と思った。隠れたいかもしれないと思い、「こやぎが隠られるようにカーテンもつけてみる?」と、ままごとコーナーの引き出しから布を出して椅子にかけ、「これで見えなくなるかな?」とつぶやいたりしてみた。

今年の三歳児の子どもたちは、一学期の半ばの頃から、年中・年長児がやっている劇ごっこにお誘いを受け、教師と一緒に何回か遊戯室に見に行っていた。なかには怖いもの

知らずで、時々舞台に載せてもらったり、踊りのシーンでは一緒に踊ったりしている子どもたちもいた。でも、ほとんどの子どもたちは、椅子に座ってジーンと見て、終わるとドキドキしながら出演者に握手をしてもらって帰ってきていた。そこでの出し物は「ピーターパン」と「おおかみと七匹のこやぎ」が多かった。その体験から、このような遊びを始めたのだろうと思ひ、三歳児はどんなふうに遊ぶのだろうと楽しみになってきた。

誰かが「みてください」（観客になって）と言うので、*ク* 見せるものなのか……。ひよつとして劇のつもり？*ク* と思ひ、客席のように椅子を二つ並べて座った。D子が「まっ、ここじゃないの」と言つて、椅子を囲いから離れるようにずーつと後方にずらして並べた。そこに座ると、A子が「音楽、音楽がある」と言ひ、あちこちで「音楽」「音楽」の声。*ク* やつぱり劇をやりたいのね*ク* と思ひ、私もちよつときうきして楽しくなつてきた。「音楽のテープを探してくるね」と、日頃、年中・年長児が使つてゐる劇のテープを取りに、急いで遊戯室に向かった。

テープを持つてきて、*ク* どうなるのかしら……。 ”と思ひつつ、「おおかみと七匹のこやぎ」の劇のテープをかけた。音楽が流れると、A子、B子、C子、ほかの子どもたちも動きが止まった。その場に立ちすくんで、流れる音楽を聴いている。みんなてしばらく聴いていた。子どもたちは「七匹のこやぎ」と宣言し、椅子並べや音楽と、自分たちなりにセッティングはしてみたものの、観客の時と、当事者としてでは聴き方が違ふのだろう。

そこは三歳、どうしてよいのかわからなくなったようだった。ここまでたどりつくのが精一杯。むしろここまでが楽しかったのかもしれない。C子は、囲いの中に入って椅子の陰に小さくなつてかがんでいるので、やぎになつていことがわかった。一応音楽に合わせて何かやろうとしているので、A子とB子に、「おかあさん、はいどうぞ」と買い物かごを渡したり、家の中に入ってやぎの仲間になり、おおかみがやって来るのを待たたりしてみた。子どもたちは、これまで見てきた劇的印象的なシーン、おおかみが「トン・トン・トン」とドアをノックするところ、おおかみが眠っているところ、水を飲むところをやろうとしていた。最後にみんなが踊る場面は、近くにいる子どもたちも手をつないで輪になり、嬉々として楽しんだ。「もう一回！」と二回繰り返した。

とても「劇」とは言えず、どう見ても部屋の隅っこに誰かが隠れていて、みんながごちやごちや集まっているとしか見えない遊びだった。でも、「七匹のこやぎ」ということばがみんなの遊びの「素」となつて、汗をかきかき、「やったね！」という嬉しそうな顔で終わった。

保育が終わり、同僚に「今日ね、おおかみと七匹のこやぎをやったのよ」と様子を話しているうちに、数日前のC子の遊んでいたシーンが思い出された。

その日は、B子とC子がタオルかけと机の間に椅子を並べて中に入り、ままごと道具や食べ物を持ち込んでいた。「おおかみは、はいれません」と言われたので、何人かの子ど

もたちと私とで「トン・トン・トン」と声をかけ、「だめー」と言っては笑い、また「トン・トン・トン」と応えるやりとりを繰り返したのである。今日の「おおかみと七匹のこやぎ」はそこからつながっていた。

数日前の時は、C子がおっこの遊びをしているのは初めてかもしれないと思っていた。今回のC子の様子、入園してからの変化を見てみると、劇おっことはいえ、なんとC子の思いが表れている遊びだったのだろうとあらためて感心してしまった。

C子には、いろいろ印象深いエピソードがある。鳥かごを揺すって餌をこぼし、「先生、へんなことになってるよ」と自分で言いに来たり、コップに水を入れて床にこぼし、「すべっちゃうし、床が腐っちゃうからやめようね」と言われると「またやる」とはつきり宣言したりしていた。また、画鋏をたくさんはずして「はい、これ」と持ってきたりなど。試されているなと思いつつ今度は何をやってくれるかハラハラさせられていた。手をつなごうとするとサツと手を引っ込めたり、じゃれあうようなスキンシップは嫌がったりしていた。

そのようなC子は、六月半ば頃からは、毎日製作コーナーで、紙を使ってなにやら黙々と作っていた。自分が安心していられる場所になっていたのだろう。この遊び



は、そこを椅子で囲い、やって来る友達を「だめ！」と追い返す遊びである。来てくれな
いとつまらない、でも「だめ」。本気ではなく、余裕のある「だめ」であった。

C子は自分の世界を守っていて、大人にしろ子どもたちにも、かかわってこられるの
はちよつと苦手。そう簡単には入れてあげないという感じだった。まずは教師に向かつて
自分の思いを出したり引つ込めたりし、相手の反応をこんなものかなと受け止め始めたの
だろう。この頃には周囲にいる友達にもこころを開き始めたのではないだろうか。こころ
の扉を開けたり閉めたり、思いを出したり引つ込めたりしながら相手との距離のとり方を
さぐっているのだろう。この頃のC子は、近づくと離れる、という感じは無くなつてきて
おり、「二皮むけたみたいね」と言われたりしていた。

あつという間になにげなく扉を開ける子もいるだろう。でも、なかにはC子のように
ゆっくり手さぐりでぎくしゃくしながら開けていくことだつてあるはず。土足でずかずか
入るのはよそう、様子を見ながらゆっくりかかわっていこうと、あらためて思わされた。

D子の様子も「うんうん、そうなのね」とうなずける姿だった。初めてのことに
は慎重で、石橋をたたいもなかなか渡らないD子。入園前からの友達のE子のこととても気
にしていたが、「E子ちゃんどこ？」「呼んできて」と言つて、自分からさがすというより
「私のところに来て！」という感じだった。年長児が開いてくれた「じゃがいもやさん」
(本物が食べられる)にも行かなかつた。誘つても保育室の出入口に立つてジッと見てお

り、動かなかつた。そのD子が、この劇ごっこでは、観客のための椅子を並べることでかわつていた。しかも、椅子を後ろにずらしていた。この行動がなんとも象徴的。自分がやるのではないが、見られることは恥ずかしく緊張することなのだろう。ちよつと離れて欲しい気持ちが表示している。ましてや、やぎになつたりおおかみになるのはとてもとても……。でも、自分も参加したくなつたのだらう。それも距離をとりながら。D子のころもち、ものごとへのかかわり方が表れていると思つた。嬉々として椅子並べをしている様子からは、自分も劇ごっこを支えているという気持ちを感じられた。

みんなは「劇」のつもりだったかもしれない「おおかみと七匹のこやぎごっこ」。三歳児にとつては、一人ひとりのころもちが表示される場だつた。もちろん三歳児に限つたことではないが、より素直にシンプルにわかりやすく表れていたように思う。

それにしても「おおかみと七匹のこやぎ」はなんと有難いお話なのだろう。「隠れる」「かけひき」「繰り返し」「怖さ」「ハッピーエンド」と、ころひかれる要素がいくつも入っている。これまでも、子どもたちの間で何度も劇遊びで繰り返されてきた演目だが、三歳児にとつても、見せるとまではいかないまでも、真似しやすい、わかりやすい、役になりやすい、参加しやすいお話である。これからどう続いていくかがとても楽しみである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)